

昭和30年代に現在のような指で挟んで止めるタイプのホチキスが販売され始め、コの字の針金を紙束に差し込んで折り曲げ固定するという基本的な構造は、今でも全く変わっていません。現在でもオフィスでは欠かすことのできない文具の一つになったホチキスですが、当初からあった欠点も残ったままです。①止めた部分の厚みが増すので、大量の資料を重ねると、ホチキスの部分だけ盛り上がり保管しにくい。②針がさびる。③シュレッダーによっては詰まりの原因になり外す必要がある、などです。

しかし、ホチキスも少しずつ変化しつつあります。その一つが針を使わないホチキス。

大きさは従来のホチキスの2周り以上大きくなりますが、何とか片手で操作可能でデスクの上においてもそれほど邪魔になる大きさではありません。ホチキスに紙を挟むまでは同じですが、本体からレバーが出ており、レバーを握るか押すような操作感で、従来のホチキスに比べると力が必要です。また、束ねられる数も針タイプより劣り、最も厚いものが止められるタイプでもコピー紙10枚が限度です。

このような制約がありますが、シュレッダーには歯の傷みを気にせずそのまま投入可能で、針のサビの心配もありません。タイプによっては厚みの増加も抑えることが可能です。

針のいらぬホチキスは大きく分けて2つの種類があります。

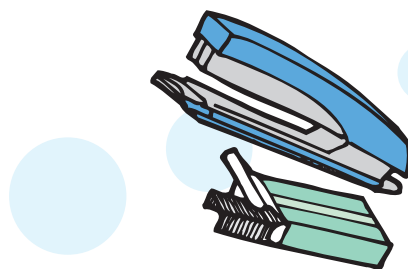
1つは抜き型タイプで、ホチキスで挟んだ部分を一か所だけ残して舌形に切り抜き、根元を折り曲げ、別に開けておいた穴に差し込んで固定するものです。数社が販売しており、切り抜き形はメーカーによって違います。もう一つのタイプは強力な力で紙束を挟み、波型に変形させて固定するタイプです。枚数が増えれば力が必要になるので、手に持って挟むで

はなく、デスクの上に置いてレバーを手で押す操作になります。一方、抜き型タイプは圧着タイプよりも長くなりますが、圧着タイプよりも軽い力で操作可能です。

閉じた紙束の保持力を実際に比較してみると、止めた場所の強度は金属製の針タイプにはかないませんでした。しかし、圧着タイプは3か所止めれば金属製の針2か所止めと同程度の保持力があまりました。抜き型タイプは保持力が弱いのですが、クリップの代用という用途であれば十分実用になる保持力がありました。

注意しなければいけないのは、一度止めた紙束をばらす時です。針式と違って専用のツールは必要ありません。どちらのタイプもゆっくり外せば外すことは可能です。ただし、一旦外してコピーするとき、オートフィーダーに引っかかりやすいので注意してください。抜き型タイプはどうしても抜いた部分が引っ掛かるので、できれば、止めた場所をはさみで切ってしまった方がいいでしょう。圧着タイプは止めた側からフィーダーに入れると引っかかりますが、開き側から入れるとオートフィード可能になります。

厚い紙束を止められないため、従来型のホチキスにとって代わるものではありませんが、家庭の場合は、家庭で数枚の資料を束ねる場合や、オフィスで領収書と社内伝票をまとめる場合など、使えるシチュエーションはいろいろありそうです。



筆者紹介

堀洋一郎（ほり・よういちろう）

1980年中央大学理工学部物理学科卒。ソニーマグネスケール株式会社を経て、1990年株式会社エフシージー総合研究所入社。現在、同社暮らしの科学部生活科学研究室上席研究員。